

ふるさと御所  
文化財探訪

玉手遺跡の  
発掘調査

文化財課  
☎60-1608



写真1 土器棺に使われた深鉢

縄文時代前期～中期(約7000年～4500年前)の日本列島は、現在よりも温暖な気候でした。東北～甲信越地方では、人々が生活をするのに適した環境だったので、広く定住生活が営まれました。一方でこの時期の西日本は亜熱帯に近く樹木が繁茂していたために定住生活にはやや不向きな環境で、生活可能な面



写真2 石囲祭祀遺構

積に制約があったことにより、人口も東日本ほど多くはありませんでした。

しかし縄文時代中期後半(約4500年前)には、気候変動をはじめとする様々な要因によって西日本でも徐々に定住化が進みます。したがって、現在、西日本各地で確認されている縄文時代の遺跡の多くはこの時期以降のものです。

京奈和自動車道建設に伴い平成21・22年度に発掘調査した玉手遺跡では、後期初頭(約4000年前)の土器棺墓や石囲遺構などを検出しました。

土器棺墓は穴の中に口径30センチメートル、器高40センチメートルの深鉢(写真1)を直立状態で埋め棺としたものです。この深鉢は表面が煤けており、本来は生活の場面で煮炊きに使われていたのですが、意図的に底部を打ち欠いています。これは器としての機能を失わせて

日常生活から切り離すことにより、棺として利用することを可能とする、という意識に根ざすものと思われます。なお、この種の深鉢は「中津式土器」という型式名で分類され、西日本一帯に広く分布しています。

一方、石囲遺構(写真2)は、自然石を一辺60センチメートルの方形に並べたものです。一見すると炉とも思えますが、焼けた痕跡はないので炉ではありません。特徴的なことは石囲の区画内から関東地方一円に分布する「称名寺式土器」の影響を大きく受けた深鉢が出土したことです。東日本では石を利用したお祭りを行う施設が数多く確認されていることと、このような土器が西日本から出土するところが稀なことを考え合せると、この石囲遺構は関東地方の影響を受けた、お祭りのための施設であったと考えられます。

また、別に出土した土製耳飾(写真3)も東日本から伝播した装飾品です。西日本の土製耳飾の多くは、やや時期が下るものが多く、この時期の耳飾は珍しいといえます。



写真3 土製耳飾 (S.=1/2)

縄文時代は長い時間の経過に伴う、直接・間接の広域の交流の存在が特徴の一つに挙げられます。西日本の縄文文化は東日本の影響を大きく受けていますが、とりわけ玉手遺跡は、その傾向がより早く、より顕著にみられる点で注目されます。

編集後記

映画「阪急電車 片道15分の奇跡」を観ました。原作はベストセラー、映画の前評判も高く、邦画好きな私としては外せない1本でした。地元の関西地域では全国に先立ち1週間早く公開されたとか。運命に翻弄されつつも新たな一歩を踏み出す女性を描いた群像劇。他人どうしがつながり支えあう、心温まるストーリーでした。

ところで最近、映画といえば「シネコン」が主流。昔ながらの映画館はほとんど姿を消しています。壁一面に看板絵が描かれた「○キネマ」。わが町の映画館に通った日々が懐かしく思い出されます。……(K)

